JSPS London

巻頭特集　今ーJSPS Londonがオモシロイ！

JSPS London INTERVIEW

平松幸三 JSPSロンドン研究連絡センター長インタビュー「センター長離任にあたって」

2分でわかる！ファンドレージング入門 其の三

第9回在英日本人研究者の会

JSPS London

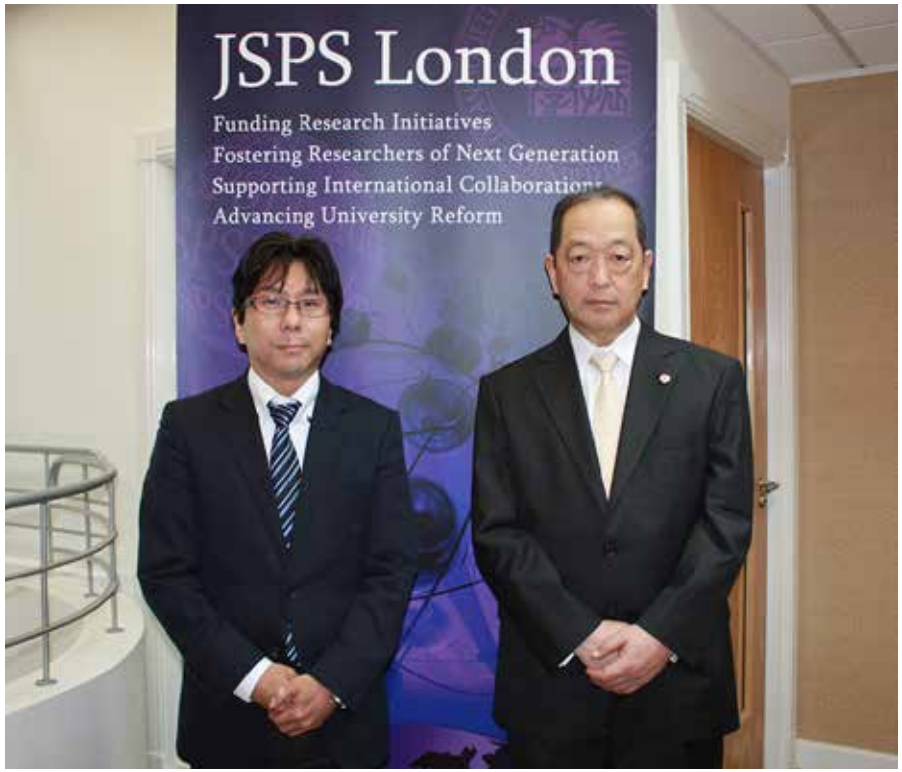
NEWSLETTER

No.40

日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター　2014年2月～4月 ニュースレター

巻頭特集「センター長離任にあたって」 2
第 9 回在英日本人研究者の会 9
Symposium at Goldsmiths College, the University of London 10
Programme Introduction Day in Northern Ireland and the Republic of Ireland 11
退任のごあいさつ 12
スタッフ写真館 13
2 分でわかる！ ファンドレージング入門 其の三 14
ウェールズ事業説明会 16
ぽりーさんの英国玉手箱 16
赴任のごあいさつ 17
平松幸三のご存じですか？ 17
Pre-Departure Seminar and Evening Reception 開催 18
JSPS Programme Information 19

JSPS インタビュー　平松 幸三 JSPS ロンドン研究連絡センター長
「センター長離任にあたって」



今年４月末をもって退任される平松センター長に、
松本副センター長がお話を伺いました。

４年間の在任を振り返って

Q（松本、以下省略）：所長は、2010 年５月から４年間このロンドンセンターにセンター長として勤務されたわけですが、今日は離任されるにあって、その思い出や今後のセンターへのご提言などを伺いたいと存じます。

A（平松、以下省略）：まず４年間にわたって多くの方に多大のご支援をいただきました。この場をかりて皆様に厚く御礼申し上げます。

第一に、前駐英海老原紳大使と、その後任の林景一大使には、陰に陽にご支援を賜ったことに心より御礼申し上げます。林大使は、ニュースレターのインタビュー記事に登壇してくださり、また JSPS 創立 80 周年記念シンポジウムならびにレセプションを大使館と共催して、同館のボールルームを使用することを快諾してくださいました。まことにありがたいことでございます。お蔭さまでシンポジウム・レセプションが盛会となり、好評を博しました。そのほか大使館からは、文化・広報担当岡庭公使、鈴木公使、宮澤公使、浅利公使、科学技術・教育アタッシェ新井氏、奥氏、松永氏、渡辺氏らのご支援を得ました。その他お名前を挙げさせていただきませんが、多くの職員の方々のお世話になりました。

ロンドンに駐在する政府系団体の連絡会議（広報連絡会議）やジェトロ・ロンドン事務所が主催しておられる研究所長会議を通して得られた情報は、わがセンターの運営に大いに参考になりました。ロンドンには日系の助成団体としてグレイトブリテン・ササカワ財団と大和日英基金がありますが、それぞれに独自の貴重な活動を展開しておられます。民間団体として、JSPS とは別な観点から貴重な日英交流をされている、と感じ入りました。政府系では国際交流基金（Japan Foundation）の活動は、JSPS とは隣りあわせで、かつ重ならない程度に近いところもあり、大いに裨益を受けました。パリに事務所がある JST とは補完的な活動をしてきました。

身内のことになりますが、本部の皆様にもこの場を借りて感謝申し上げます。特に、小野前理事長、安西現理事長には大所高所からロンドンセンターの運営を見守っていただきました。加藤国際事業部長は、担当部長として私の拙いセンター運営を支えてくださいました。さらに、ロンドンセンターでは、関口、齋藤、松本の歴代副センター長たちは、いずれも優秀で、かつ忠実に仕事をされました。また文部科学省から派遣されたアドバイザーの疋田氏、高橋氏、庄司氏からは貴重なアドバイスをいただき、国際協力員だった多田氏、吉川氏、横山氏、松尾氏、加賀氏、安達氏、熊谷氏、木谷氏、安藤氏には実務においてご苦労をかけました。彼らは、ロンドンセンターでの経験を今後の仕事に活かしてくれることと信じています。最後になりますが、けっして忘れることができないのは、現地職員ポリ・ワトソン氏の貢献で、シンポジウムの申請と選定、大学訪問の手配など、対外的な調整のほとんどを担当して、見事な仕事ぶりをみせてくれました。同じく現地職員として勤務された奥村氏、永田氏、西澤氏は、縁の下の支えとしてセンターの活動を支えてくれました。ほんとうに感謝する次第です。

Q：英国側の学術団体との交流もありましたね。

A：そうですね。Royal Society, British Academy, British Council との協力関係は、伝統ある学術団体との友好的交流を維持していくことの大切さを感じさせられましたし、EPSRC, ESRC, MRC, BBSRC といった助成機関（Research Councils）との交流は、意見交換を通して彼我の助成思想の違いなどを知る貴重な経験となりました。

あと、現在ロンドンには京都大学、九州大学、慶應義塾大学、同志社大学、立命館大学が事務所を構えておられますが、私どもとよい関係を結んでいけたと思います。これらの５校のさらなるご発展をお祈りいたします。

Q：４年間の在任中にあった思い出深いことはどのようなことでしょうか？

A：そうですねえ、なんと言っても 2010 年の Royal Society 350 周年記念行事でしょうか。エリザベス２世女王陛下の御臨席のもと、日本からは当時の小野理事長、金沢日本学術会議議長、尾身幸次 STS 理事長らが列席されました。設立以来連続して活動している世界最古の学術団体である RS は、綺羅星のごとき科学者がフェローになってきた団体で、その記念行事に参加することができて、ほんとうに光栄でした。

それと 2012 年には JSPS の 80 周年記念シンポジウムを在英日本大使館で開催させていただきましたが、これも忘れがたい行事です。安西理事長にもお越しいただきました。英国では、去年は「長州ファイブ 150 年」と「ジャパン 400」の行事が目白押しに開催されました。「長州ファイブ」は伊藤博文を含む５名の長州藩の若者が密航して UCL に留学してから 150 年を画したイベントで、「ジャパン 400」は東インド会社が平戸に商館を開いて 400 年、当時のジェームズ１世・６世王が徳川家康に望遠鏡を贈って、言わば国交を開いたのを記念したものでした。

JSPS80 周年記念シンポジウムでの
Kagami-biraki Ceremony

英国ではこのように記念年に行事をすることが多く、歴史を重んじる人たちですから、JSPS が助成団体として 80 歳というのは、世界的に見ても意外と古参の部類に入るようで、驚きとともに評価していただいたので、職員一同誇らしく思いました。

ロンドンセンターの特長

Q：ロンドンという地にこのセンターがあることをどう評価されますか？

A：やはり「地の利」ですかね。先ほど述べましたように、関係諸機関との交流を振り返ると、ここにいるのは恵まれているな、と実感させられます。それにロンドンは、世界の、少なくとも中心のひとつです。さまざまな情報が得られて、日本にいては見えにくいものがよく見えたように思います。

Q：具体的には？

A：英国内の大学事情が見えるのはとうぜんとして、まず英国の研究者にとってもっとも関係の深いのは、アメリカだということを感じますね。研究レベルや予

算規模においてアメリカがトップであることは否めない事実ですからね。それとＥＵ諸国で起こっていること。これは日本では分かりにくいように思いますが、この点がかなり見えてきました。もちろんEUについては、ロンドン以上にボンやストラスブールからよく見えるだろう、とは思いますが…。また英連邦（Common Wealth）諸国の動向や近年勃興しつつある中東湾岸諸国の情報は、ロンドンでもっとも豊富に入手できるのではないか、と思います。それに意外と中央アジアやバルカン諸国などの旧社会主義国における大学情勢が急速に動いていて、そういったことを感じた４年間でした。

Ｑ：ロンドンセンターの活動をどう位置づけておられますか？

Ａ：海外センターというのは、一言で言うと、「学術の大使館」。これは私が赴任するときに、前小野理事長から言われたことです。基本線を守りつつ、あとはセンター長の思うように柔軟に力を尽くしてほしい、と。ロンドン・センターでは「日英学術交流」、つまり英国内の学術団体との交流、英国の研究者を日本に送る事業の関連業務と日英協働シンポジウムの開催などをしていますが、在英日本人研究者のネットワーキングとか、JSPSの同窓会のお世話とかもしています。ただ私は、こういった事業も所詮JSPSというものを知っていただかないと始まらない、と考えまして、そのためにJSPSのPR活動を積極的に行いました。JSPSの活動内容の周知を図るだけでなく、JSPSのプレゼンスを高めることにもつながる、と信じて、力を入れたつもりです。

UK-JSPS Alumni Association
Executive Committee メンバーとの会議

広報活動・情報収集・プレゼンス

Ｑ：プレゼンスという点では最近中国が大きくなってきていますが。

Ａ：その通りだと思います。今、英国内でもごたぶんにもれず、中国の存在が大きくなってきて、特に理系の大学院は中国からの留学生であふれていますし、中国は英国との学術交流に熱心です。下世話な表現ですが、中国の風がビュンビュン吹いている、という感じがします。しかし最近、中国や韓国の追い上げが激しいとは言え、まだまだアジアにおける日本の学術的優位は保てていると、これはいささか贔屓目かもしれませんが、そう信じています。学術日本のプレゼンスを高める努力を怠ることはできませんね。先ほど申したように、JSPS創立80周年記念シンポジウムのようなイベントを打っていくことが大事ではないでしょうか。

Ｑ：４年間でずいぶんと大学を訪問されましたね。

Ａ：そうですね。これもプレゼンスを高める努力の一環でもありますが、積極的に事業説明会を実施してきました。実際は、年に５回開催されるシンポジウムに参加する機会にその途上や近郊にある大学もあわせて訪問するようにしましたので、４年間で合計50校ほどになるでしょうか。複数回訪問した大学もありますから、100回は超えるかもしれません。オックスブリッジのようなすばらしい大学もあり、小さな大学もありました。そうした訪問先の中でもっとも印象に残ったのが、本部がインバネスにあるハイランド・アイランド大学Orkney校でした。スコットランド最北端東に位置するOrkney諸島にある小さな大学分校です。ここでなされている研究レベルの高さと博士課程を維持している教職員の志には、打たれましたね。日本にも地方に小さな大学が少なからずありますが、そういう大学の研究教育レベルは必ずしも高くありません。Orkney以外にも、スカイ島のSabhal Mòr Ostaig校、ここは授業をゲール語でやってます。あるいはウェールズのLampeter校、ここは1822年創立です。どれもそれなりに高い教育・研究レベルを維持していて、こ

Orkney Collegeでの意見交換

のような大学が存在しうるというのがこの国の底力だ、と感服したものです。学ぶべきことですね。

Q：大学を訪問して何を見学されたのでしょうか？

A：英国内の大学を訪問する目的のひとつに、職員に大学を見せることもありました。彼らの海外センター勤務の目的のひとつが「研修」ですので、その一環として、英国内の大学を見てもらうように努力しました。大学を見ると言っても、研究室・実験室は、多かれ少なかれ、日本も似ています。だからその他の施設を見せていただけるように訪問先にお願いしました。英国の大学には、売店や旅行代理店、食堂・バー、フィットネスクラブがあるのはふつうで、ときには劇場があったり、ナイトクラブ（ディスコのようなもの）があったりします。たいていは Student Union が運営しています。学内のいたるところに飲料・スナックの自動販売機と簡単なイスとテーブルが置かれてあって、ちょっとした出会いが起こるようにさまざまな工夫がなされています。異分野との出会いが新しい学問につながる、という信念が感じられますね。それに授業終了後学生たちが、図書館に

時には長靴に履き替えて（Research Centre for Scottish Agricultural College 訪問）

足を運ぶ姿など、日本の大学とはかなり違いがあります。

事務組織や職員も日本とはとうぜん違い、事務の部課長クラスだと博士号を持っている人が少なくありません。博士号をもっている人は研究経験があるわけですから、研究者の求めることと大学経営との折り合いをつけるような仕事では、自らの研究経験が役に立つ、と思います。このような実態は、日本から赴任した事務職員の方たちにとって刺激となり、また今後の参考になる、と信じますが。

Q：日英学術交流シンポジウムもずいぶんしてこられましたね？

A：JSPS ロンドンが支援している日英合同シンポジウムも、4 年間で 15 回ほど実施しました。大規模な学術会議の一部を支援したこともあり、小規模の専門家同士の熱のこもったシンポジウムを支援したこともあります。私の印象深いシンポジウムは、UCL で開催された「ミトコンドリア」をテーマにしたものです。内容は門外漢に分かるようなものではありませんでしたが、会場につめかけた若い研究者の熱気が伝わってきました。「どの学会で交わした議論よりも充実していた」と参加された東大教授に言われたときは、支援者冥利に尽きる、と思いました。

Q：センター主催のシンポジウムも始められましたね。

A：はい。シンポジウムは、基本は研究者からの申請に基づいて行われるのですが、これだとシンポジウムの形態が専門的な学術分野に限られる傾向にあります。私はもっと異なる形のシンポジウムを実施したいと考え、ロンドンセンターが組織するシンポジウムを 2 回実施しました。第 1 回は 2011 年度マンチェスター大学で実施した “Risky Engagement”、第 2 回は 2012 年度イーストアングリア大学で実施した “ 大学ミュージアム ” です。どちらもこのシンポジウムがなかったならたぶん会うことのない研究者同士が、一同に会して意見を交換し、価値ある成果を見える形にしてくれました。在任中に支援した中でもこの 2 件の成果がもっともはっきりと現れたので、音頭を取ったものとしては、いちおう満足しています。

“大学ミュージアム” シンポジウム参加者の皆様と

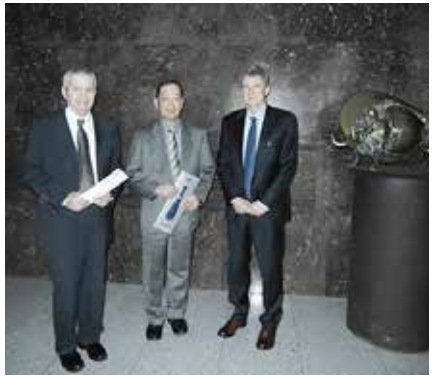
英国外の大学訪問

Q：新しくいくつかの国をロンドンセンターが担当することとなって、英国外にも足を伸ばされましたね。

A：はい。従来アイルランド共和国には訪問していたのですが、去年から旧ユーゴスラビア諸国とベネルクス諸国をも担

当することになり、旧ユーゴスラビア４ヶ国とオランダの大学をも訪問しました。旧ユーゴスラビア４ヶ国を訪れたのは、偶然のご縁があったからです。2011年の年末でしたが、ボスニア・ヘルツェゴビナ大使館でコンサートがあり、日本人の演奏があるからということでお招きをいただきました。

そこでスロベニア、セルビア、クロアチアの各大使とお目にかかったのですが、JSPS ロンドンの仕事をご説明申し上げたところ、どなたもたいへん興味を示されまして、あとで分かったのですが、この４ヶ国のうち３ヶ国の大使が学者出身でした。その後、約１年半にわたってこれらの国の学術事情に関する情報を入手し、またそれらの国に駐在している日本大使館とも連絡をとって、最後は当該国の在ロンドン大使館から紹介される形で先方の大学を訪問した次第です。



Jožef Stefan Institute（スロベニア）訪問

Q：私（松本）が赴任する前のことですが、実に用意周到という感じですね。旧ユーゴスラビア諸国の場合は、たまたまそういう「縁」があったからよかったのですが、未知の国に行くときには、どのようにするのがよいのでしょうか？

A：そうですね。旧ユーゴスラビア４ヶ国への訪問の仕方は、ある意味では、初めて訪れる場合のひとつのモデルケースかな、と考えています。研究者として私は、現場を知らずにものを言うな、と教えられてきました。未知の地域のフィールド調査をするとき、自分のモノサシだけでその地域を見てしまうと、実態とは賭け離れた理解をしても気がつかない、言わば、「プロクルーステースのベッド」のような理解ということになりかねませんし、逆に、やみくもに行くだけではローカルなことしか分からず、「木を見て森を見ない」状態に陥りかねないですね。やはり両方をうまく組み合わさないといけないものです。論語に「学びて思わざれば則ち罔し、思いて学ばざれば則ち殆し」という言葉がありますが、よく似ています。

また、フィールドワークをするときにどこで調査するかは、いちおうある程度事前の見当をつけるのですが、細かいところはけっこうなんらかの「縁」によって決まっていくものです。「縁」に頼るなどというのは、なにか展望を持たない、いい加減なことをしているように聞こえるかもしれませんが、逆に言うと、上から眺めて、あそこに行きたい、と縁もゆかりもないところにいきなり入っていくことのほうが乱暴と言うことができますね。そういうやり方をしても、うまくいかないことが多いですよ。

ロンドンにいると各国の大使館がありますから、訪問国の大使館に行ってみて、

University of Rijeka（クロアチア）での事業説明会

VU Amsterdam（オランダ）での事業説明会

情報を得るのが効率的ですね。そのためにはこちらの訪問意図をはっきりさせないといけません。旧ユーゴスラビア諸国のように相手側から働きかけられた場合には別ですが…。JSPS としてグローバルに展開する方向性を打ち出したのですから、センター所在国外の国に対するポリシーを明確にしておく必要があるでしょうね。

Q：行かれてみてどうでしたか？

A：やはり行ってみないと分からないことがありますね。かなり一生懸命事前に情報を入手したつもりでしたが、それでは得られないものが相当ありました。オランダのレベルが高いのはともかく、スロベニア、クロアチア、セルビアの学者

もよくがんばっていて、やはり欧州の歴史を感じさせられました。

これらの訪問を通して痛感したのが、EU 圏内の大学の競争です。EU 圏内は人の移動が自由ですから、人材が英独仏といった経済強国に流出するわけで、特に小国の大学はそれを強く意識して対策を採ろうとしている様子が伺えます。今後 EU 圏内の大学がどう変化していくか、目が離せませんよ。そういう点で現地の大学関係者のナマの声を聞くことができたのは大きな収穫でした。それに現地の日本大使館が科学技術交流に力を入れていることも印象深いことで、大使や担当館員の御意見を伺えたのは、今後の活動にたいへん参考になる、と思います。

University of Belgrade（セルビア）での事業説明会

センターの運営と職員について

Q：センターの運営で気を配られたことは？

A：ロンドンセンターに勤める職員は、だいたい 1、2 年で交替するのですが、彼らの滞在期間中に何を学んでもらうのかということにもセンター長として心を配ってきたつもりです。基本方針として、いかにも日本の事務所、という雰囲気にはならないように心がけはしましたが、それでも事務所内はほとんど日本ですから、外の世界、つまり英国社会と接触する機会は限られます。もし家族とともに赴任していたなら、協力員は自宅ではもっぱら日本語を話し、英語はたまに口にするだけという状況になりかねません。私がかつて聞いたある会社員のドイツ駐在時の話を、いささか極端な事例ですが、紹介しますと、「駐在事務所は上階が日本人、下階がドイツ人と分かれていて、事務所は完全に日本そのもの。アフターファイブは、所長以下日本人同士で日本料理屋に繰り出し、晩酌と夕食をすませたあと、店の 2 階でマージャンをする。土日は社員同士のゴルフ。日常的にはまったくドイツにいる気がしなかった」と。

Q：これでは海外に赴任している値打ちがありませんね。

A：だから職員には、なるべく仕事は勤務時間内に済ませて、町に出かけるよう促していました。イギリスを見るのは往復の通勤とスーパーの買い物だけ、などということにはならないように。

Q：ロンドンに駐在する職員としての心がまえのようなものはあるでしょうか？

A：ロンドン在住のピアニスト内田光子さんが、こうおっしゃっています。「私程度の才能の者は、日本に住んだら満足な演奏ができない」と。いささかおごかましいのを承知でその真意を推し量りますと、ロンドンの空気を吸い、TEA を飲み、食事をし、町を歩き、人々に会う、という、毎日の生活が、知らず知らずに演奏に影響を与えてしまうものだ、と。これは JSPS ロンドン事務所に駐在する者にもあてはまることではないでしょうか。日本はまだまだミステリアスな国で、こちらの人たちからすると、立ち入りにくい、違和感のある社会と見えています。それに加えて、現地の生活に溶け込もうともせず、いかにもドメスティックな雰囲気を撒き散らして、もちろんご本人は気づきもせずにですが。これではこちらの人にとってガラパゴスに映りかねませんね。またそのようなメンタリティでこちらの制度や文化を理解してもとうぜん限界があり、下手をすると大いなる誤解をしかねません。われわれはある意味で日本の学術世界の営業担当ですから、われわれを見て日本に違和感を持たれるとしたら、マイナスだと思います。

Q：英国に暮らして学ぶことは？

A：私は英国社会にとって重要なことは、公平（fairness）と自助（self-help）だと思います。公平であることは、複数の利害関係や主張の折り合いをつけることでもあり、かならずしも一律に規則を適用することにはなりません。問題は、具体的に正義が実現するかどうかであって、だから弱いものが優遇されるのは、とうぜんのことになります。乗り物の中

などで席を譲るといった些細なことでも、弱者に対する同情から譲っているのではなく、公平の実現という観点から考えるべきです。日本の場合、杓子定規に決まりごとを当てはめることによって公平を保とうとする傾向が強いと思いますが、その点がこちらから見ると硬直した社会と映ります。自助とは、自分のことは自分で決し、その責任は自分が取る、というもので、もちろんその個人の自由には一定の限度があるわけですが、他人に迷惑をかけず、また自ら責任を取ることができる範囲であれば、個人の意思決定と行動を尊重する、というものです。たとえば歩行者は、赤信号でも安全と思えば道を渡りますね。自助の観念があるからで、それを行儀が悪いなどと見下すのは浅はかなことです。この公平とか自助とかを理解しないと、イギリスの政治も社会も、大学の運営についても、よく分からないように思います。私は、これが民主主義の基盤であるとともに、独創的な研究はこういう社会から生まれやすい、と考えます。

これからイギリスに滞在する日本人職員の方には、この点を学んでほしい、と願うものです。

ロンドンセンターの将来

Q：JSPS の今後についてはどうでしょうか？

A：JSPS は、グローバルに国際展開するとの方針を出して、海外センターをこれまでに増して活動的にしようと、新しい戦略を打ち出したわけですが、この意味するところは、学術面の発展途上国や中進国、あるいはかつてはそこそこ先進的だったが今はやや遅れを取っている国などを対象としていくことになりますから、今後、多様な展開が求められることと思いますね。まさにロンドンセンターが設立 20 年を迎えるにあたって、従来のセンター運営とは一味違ったものとなり、ひとかわ脱皮するときにあたるように思われます。次期竹安センター長をはじめスタッフの皆様方のご活躍を期待しています。

Q：イギリス国内の学術団体との交流は？

A：Royal Society、British Academy などとの交流は、引き続き行っていくと思いますが、今後は Research Councils とも積極的に交流するとよいと思います。英国の RC は、独自に研究所を持っていたりして、JSPS とは性格が異なりますが、お互いに違いを認め合って協働しうることを実現するとよいのではないでしょうか。

Q：英国外の学術団体とはどう交流するとよいでしょうか？

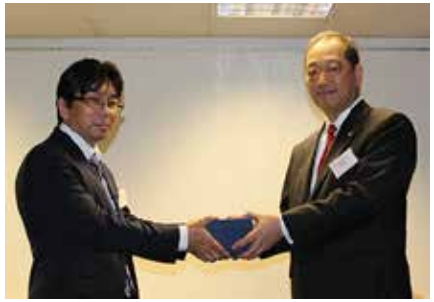
A：アイルランド共和国とは、かねてから交流を行ってきましたが、同国は去年 Science Foundation Ireland が日本との学術交流に試験的プログラムを導入しました。非常によく練られた企画と思いました。あとベネルクス諸国は学術レベルも高く、大学を訪問してみた印象では、英国と比べて遜色ない感じがしますね。「オランダ王立芸術科学アカデミー」とはぜひ交流を深めていくべきです。旧ユーゴスラビア諸国は、それぞれに特徴がありますが、まずは EU に早くから加入したスロベニア、去年加入したクロアチア、かつての中心地だったセルビアの科学アカデミーと交流していくとよいでしょう。

2015 年度は、欧州委員会との交流を模索する年になるようですが、ここととどのように交流するのかは、慎重に検討する必要があるでしょうね。まず日本と欧州委員会との学術交流の大きな枠組みの中で JSPS として明確な目標を立て、どのような形の交流を行うのか、関係諸機関と調整しつつ対処するべきである、と考えています。何をするかを決めないでは情報も収集できませんから。この点は本部と緊密に協議する必要がある、と思います。

ロンドンは、単にイギリスの中心であるだけでなく、ここに世界中の大使館が設置され、世界中の情報が集まる都市です。この利点を今後とも活用していくことについては強調しすぎることはない、と思っています。

Q：本日はどうもありがとうございました。また 4 年間ご苦労様でございました。帰国後もどうかロンドンセンターのことを見守っていただきたい、と存じます。

A：ありがとうございました。お世話になりました。



松本副センター長より記念品贈呈

第 9 回在英日本人研究者の会

在英日本人研究者の会の参加者と

2014 年 1 月 30 日（木）JSPS London レクチャーホールにて、第 9 回在英日本人研究者の会が開催された。当会は、大学その他の公的研究機関で研究に従事されている在英の日本人研究者を対象としたネットワークづくりと、当センターの活動への協力依頼や意見交換等を行う機会として 2005 年度から実施している。

今回のイベントには、52 名の在英日本人研究者の方にご参加いただいた。会は、平松センター長の挨拶にはじまり、松本副センター長の JSPS London の活動の説明、続いて研究者各自からの自己紹介を行った。その後、プロモーションセッションと題して、渡辺栄二 在英国日本国大使館参事官から「高等教育のグローバル化政策について」、松浦孝 京都大学産官学連携本部欧州事務所特定教授から「京都大学の国際連携活動」、緒方健 ケンブリッジ大学リサーチ・フェローから “Toward next-generation lithium-ion batteries: Revealing key lithium-silicide phase transformations in nano-structured silicon” というテーマで各々の発表が行われた。

後半のパブリックレクチャーでは、Dr Simon Kaner, Centre for Japanese Studies, University of East Anglia から “Introducing Jomon dogu to their European Neolithic cousins” というタイトルで講演を頂いた。同氏は、日本の縄文文化の研究を通じて、その人類史的意義を捉え、数々の展覧会やシンポジウムによって国際的に情報を発信している研究者の一人である。レクチャーでは、写真を交えて様々な形の土偶を紹介しながら、土偶が作られた頃の歴史背景、土偶の魅力や人類史的な意義を熱心に説明された。その後の質疑応答では、宇宙人と土偶の関連はあるのか？と興味を掻き立てるような質問や学術的な側面からの質問など、熱心な討論が行われた。

第 2 部のネットワーキングレセプションでは、参加者が一堂に介した懇親会が行われ、参加者の様々な情報交換や新たなネットワーク作りの場として、貴重な時間を共有することができた。本会は大盛況のうちに幕を閉じたが、更なる交流の場として、近くのパブに足を運び、英国式の熱心な交流は夜遅くまで続いた。　（松本）

在英日本人研究者の会からのコメント

廣畑貴文（Reader, York University）
久し振りに大勢の皆様にお目にかかれて楽しい時間を過ごすことが出来ました。特に、土偶のお話は非常に興味深く聴かせて頂きました。

藤山拓（Lecturer, University College London）
他の分野の人との意見交換を通じ、研究のアイデアをいくつか頂きました。貴重なネットワーキングの機会を設定頂き、有難うございました。

本間貴之（Research Associate, Imperial College London）
研究室にいるとなかなか自分の専門分野以外や他大学の人と話をする機会を得にくいが、こうして日本人ということで集まる機会を作って頂くと、ネットワークが広がって助かります。また、日本の情報も聞くことが出来、有意義な時間を過ごすことができました。

石田友梨
（PhD Candidate, Kyoto University）
イギリスに到着したばかりの時に参加させていただきましたが、温かく迎えていただき、イギリスでの生活や今後の研究に役立つ多くの情報をいただくことができました。貴重な交流の機会をいただき、どうもありがとうございます。

Dr Simon Kaner のパブリックレクチャーの様子

Symposium at Goldsmiths College, the University of London

日英のスピーカーと参加者による討論会

2014 年 2 月 19 日 ～ 21 日、Goldsmiths College, the University of London（以下 Goldsmiths College）にて、国際シンポジウム “Safeguarding the Intangible: Cross-Cultural Perspectives on Music and Heritage”（音楽文化遺産を守る～文化の垣根を越えて～）が開催された。本シンポジウムは、JSPS London が実施する日英シンポジウム開催スキーム（在英日本人研究者募集分）で採択されたものであり、在英日本人研究者である松本直美講師（Department of Music, Goldsmiths College）のオーガナイズのもとで実施された。無形文化遺産保護条約が 2003 年にユネスコで採択されたことを受け、これまで行われてきた様々な文化保護の手法・政策を考察し、理解を深めるとともに、それらが音楽遺産に与える影響を討議することが、今回のシンポジウムの目的である。

テムズ川の南、ロンドン南東部にある Goldsmiths College

スピーカーとして、日本側から伊東信宏教授（大阪大学）、輪島裕介准教授（同大学）、寺田吉孝教授（国立民族学博物館）、川瀬慈助教（同機関）、吉田寛准教授（立命館大学）の 5 名、英国側からはオーガナイザーの松本講師、Dr Caroline Bithell（University of Manchester）、Dr Amy Brosius（University of Birmingham）、Dr David Hughes（SOAS）、Dr Min Yen Ong（同大学）、Dr Simon Maguire（Sotheby's）、Dr Simon Mills（Durham University）、Dr Lara Pearson（同大学）、Dr Barley Norton（Goldsmiths College）、Dr Anthony Pryer（同大学）、Dr Hwee-San Tan（同大学）、の 11 名が発表を行った。シンポジウムには若手からベテラン研究者まで連日約 120 名の参加があり、質疑応答の時間には国籍、年齢、研究分野にとらわれない質問が飛び交った。

本シンポジウム中には、Goldsmiths College の Asian Music Unit の発足式も行われ、初日には大学の研究チームによる中国伝統音楽の演奏と舞踊が披露された。また最終日には、松本講師による 17 世紀イタリア・オペラの考察と実際のパフォーマンスが行われ、会場は大きな盛り上がりをみせた。このように、シンポジウム中はスピーカーによる発表のみでなく、音楽演奏や、参加者を巻き込んでの討論会、ドキュメンタリー映画の上映等も行われ、発表者と参加者の間の双方向の意見交換を促す雰囲気作りにつながっていた。

中国伝統音楽と舞踏のパフォーマンス

開催パートナー大学のひとつである大阪大学からは、伊東教授のオーガナイズのもと、院生 6 名が研修を兼ねてシンポジウムに参加し、自らの研究発表に臨んだ。各発表の後には Goldsmiths College の学生のほか日英のスピーカーも交えた活発な討議が続いた。

日本の文化遺産保護制度が他国に与えた影響は大きく、その意味でも今回のシンポジウムへの日本人研究者の参加は不可欠なものであった。発表内容や討議結果を広く伝えるため、今後、日英双方から本シンポジウムをうけての学術論文の出版が予定されている。JSPS London としては、生命科学分野のみでなく社会科学分野における日英交流支援の意義を再確認する機会となった今回のシンポジウムであり、これをきっかけに、更なる日英交流の発展につながることを期待したい。（木谷）

シンポジウム最終日、参加者と

Programme Introduction Day in Northern Ireland and the Republic of Ireland

2014 年 2 月 26 日から 28 日にかけて、北アイルランドとアイルランド共和国を訪問し、Queen's University Belfast、University of Ulster、University College Dublin にて事業説明会を行った。これら

Queen's University Belfast

の大学を訪問するのは 2 年ぶりであったが、JSPS では生命医学や生命科学、IT 分野から史学、経済学にいたるまで幅広い研究を支援しており、今回の訪問を通して、大学との交流をさらに深めることができた。また、事業説明会では、この地域の研究者が、日本との共同研究にあたり、どの分野に今最も関心を持っているのかを把握することができた。中でも、University of Ulster の Art and Design Research Institute と Institute for Social Sciences は日本との共同研究にひときわ意欲的であった。英文での学術誌をまだ発行していない等の理由で、海外との共同研究を望んでいるにも関わらず、海外の研究者から知られていない日本人研究者もいるが、JARC-Net や ReaD といった研究者検索ポータルシステムをこのような機会に現地研究者に紹介することにより、日英の学術交流の幅がより一層広がることを期待する。

なお、今回訪問した大学の学生の大部分は地元出身であることがわかった。理系学部出身の卒業生により、地域の産業は急速な発展を遂げており、就職率も高いという。3 大学の理事らはいずれも、JSPS 事業を通しての日本人研究者受入れに強い意欲をもっており、質の高い研究設備を提供でき、かつ英語圏であることを強調したうでえで、今より多くの日本の研究者が、アイルランド地域で研究する可能性について考えるようになってほしいと話していた。

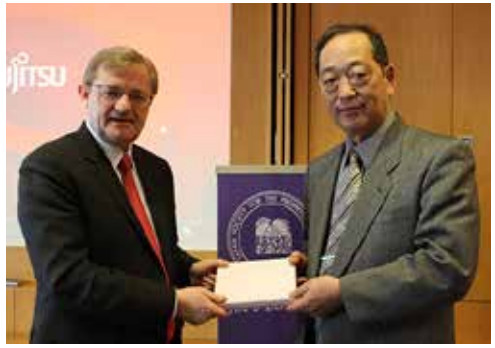
Science Foundation Ireland の職員と

また、ダブリンでは Science Foundation Ireland（以下、SFI）を訪問し、SFI が昨年立ち上げた International Strategic Cooperation Award について、Prof Mark Ferguson（Director General of SFI, Chief Scientific Advisor to the Government of Ireland）から説明を受けた。このプログラムはアイルランド共和国側が日本と特に共同研究を望む分野を 6 つ設定し、二国間での研究者交流やワークショップの開催を支援するものであり、2 年間を通して 100 万ユーロが充てられる。両国での代表研究者も決まり、実施内容の詳細が SFI のウェブサイト[1] で公開されている。JSPS London からは、本会の事業を利用して日本人研究者の渡航費等の資金を確保し、交流をより活性化させてほしいとの意思を伝えた。

ダブリンでの研究者とのネットワーキング・イベント

さらに今回の出張中に、現地研究者とのネットワーキング・イベントを両地域において開催した。北アイルランドのベルファストでは、産業界を巻き込んでの日本との共同研究について、大学や地元政府の取組みについて情報が得られたほか、日本人研究者の北アイルランドのイメージを向上させ、双方向の交流を促進するために JSPS が何ができるのか、についても議論が及んだ。ダブリンでは、JSPS London が管理している UK-JSPS Alumni Association に、アイルランド共和国の研究者を本会員として含めることの可能性について、協議を行った。

JSPS London の活動内容を広く周知できただけでなく、大学や研究支援財団法人の役員から研究者まで、様々な現場の声を聞くことができた今回の出張を、今後アイルランド地域と日本の交流促進のために活かしていきたい。　（Polly）


Prof Hugh McKenna, Pro Vice Chancellor for Research and Innovation, University of Ulster と平松所長

[1] www.sfi.ie/international/isca/japan.html

退任のごあいさつ

2014 年春、それぞれ文部科学省、名古屋工業大学、東京大学から JSPS London に着任した庄司アドバイザー、安藤国際協力員、木谷国際協力員が任期を終え帰国した。また、2014 年冬には永田 Research Administrator が退任、帰国した。以下、帰国職員からのコメントを紹介する。

「バスの 2 階の最前列」「夕方のパブ」「晴れた日のハムステッド・ヒース」、英国に来て好きになったこれらの場所に行けなくなるのはとても残念です。一方で、滞在期間の大半を向かいの建物の解体・新築の工事の音に悩まされ続けたオフィスから開放されるのは嬉しい限りです。

1 年数ヶ月の滞在期間中には様々なことがありましたが、何よりも様々な人達が緩やかなルールの下でそれぞれに暮らすという交差点の様なロンドンの街の魅力にうたれました。バスの中で見る様々な顔、地下鉄の中で聞こえてくる多様な言葉…。この街の魅力に触れる機会を与えてくださった方々、魅力を共有した皆様方に対して心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

庄司 正人

JSPS London では会計業務を中心として、事業説明会やシンポジウムといったイベント業務等、多岐にわたる経験をさせていただきました。初めての海外生活・仕事にとまどうこともありましたが、皆様に支えていただき無事研修を終えることができました。

世界各国のヒトやモノが集まる英国・ロンドンという場所で、英国のみならず、日本が世界でどう捉えられているかを肌で感じられたことは、何物にも変えがたい貴重な経験です。平松センター長、松本副センター長をはじめセンターの皆様、2 年間の研修を支えてくださった日本学術振興会の皆様、名古屋工業大学の皆様に感謝を申し上げます。

安藤 光子

2013 年 4 月から一年間、総務・広報担当として様々な業務を経験させていただきました。広報の大きな業務である本ニュースレターの編集では、「何を誰にどう伝えるか」を考えることの大切さを再確認することができました。また、事業説明会やシンポジウムでは、日英の研究者やスタッフの方々の生の声に触れることができました。

多文化都市であるロンドンでの 1 年を通して、業務と私生活の双方において、国籍・年齢・考え方の異なる多くの人々に出会うことができたことは、生涯忘れがたい経験となりました。暖かく支えてくださいました日本学術振興会と東京大学、お世話になった皆様に、心からお礼申し上げます。

木谷 由佳

約 1 年 6 ヶ月のあいだ、リサーチと庶務を担当させていただきました。英国の高等教育に関するリサーチを通して、教育事情だけでなく、英国という社会の大きな流れや文化的・歴史的背景をも垣間見ることができたことは、4 年半在住したこの国をより理解するための大きな助けとなりました。また、80 周年記念イベントや海外での事業説明会など、数々の事業にも携わり、たくさんの貴重な経験をさせていただきました。

さまざまなバックグラウンドを持つ個性豊かなスタッフがともに働くオフィスはとても和やかでした。温かく迎えてくださり、たくさんのことを教えてくださった平松所長をはじめ、スタッフの皆様には大変感謝しております。この場を借りてお礼を申し上げます。

永田 衣緒菜

スタッフ写真館
今月の一枚

"There's spring in the air." by Hideyuki Matsumoto

春の陽気に誘われて、おばあちゃん達の憩いの場に。
ここリッチモンド・ヒルの眺めは最高です！

2 分でわかる！　ファンドレージング入門 其の三 I

Point　**大学は、あらゆる資金提供を喜んで受け取って良いか？**

Introduction

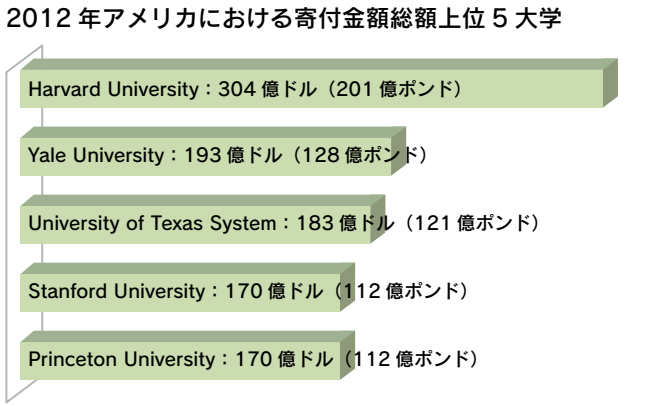
英国政府は 2010 年 10 月、「包括的歳出見直し」を発表し、以後の 4 年間、高等教育を所管するビジネス・イノベーション・技能省の予算の 25%、また高等教育機関の運営費交付金の 40%を削減することを決定した。それに関連して、2012 年から授業料の値上げが政府によって承認され、多くの高等教育機関は、授業料の上限額である年 £9000 まで引き上げを実施して、自力による予算確保に奔走している。

この様に英国の大学では、政府からの予算が減少する中、その穴埋めに授業料の値上げのみならず、政府系、財団・企業等の団体や個人から更なる資金調達を積極的に実施していかなければならない。特に英国の大学は、世界的な企業と同様、競争を優位に進めるためにも、国際的な資金の活用は不可欠であると考えている。世界大学ランキングで上位を独占する米国の大学は、様々な団体や個人から多額の資金を集め、数年以内に英国の大学が資金的な対策を講じなければ、英国の優秀な学生はフルサポートの奨学金を、また優秀な研究者は素晴らしい研究環境を求めて、米国に渡ってしまうのではないかと、英国大学関係者は危惧している。無論、世界には、英国の大学に資金を提供しても良いと考える財団・企業等の団体や慈善家等の個人が多数存在している。しかし、外部から資金提供を受けることは、大学にとっての学問的誠実性（Academic Integrity）を阻害する可能性や、大学の評判を貶める危険性を孕んでいる。

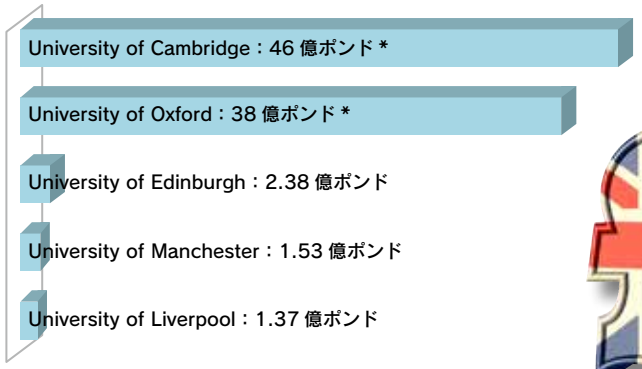
資金受領における問題点

実際、英国の大学が資金提供を受けるうえで、二点の疑問を呈する。一点目は、**資金をどのように使うべきか？** である。大学は教育・研究を担う公共的機関であるが故に、その目的を達成するという点では、適切に使用が約束されている。しかし、学問的誠実性を阻害する可能性は、排除しないと大きな問題に発展する。2012 年に Durham University は、250 万ポンドの資金提供をクウェートの元首相から受け、中東国家に関する理解を促進するため、サバーハ家[1] 研究プログラムと博士課程のコースを設立した。しかし、英国とは異なる政治形態の国家から

（図 1）米英における寄付金総額上位 5 大学（2012）



出展：National Association of College and University Bisiness Officers and Commonfund Institute



出展：2011 – 12 Higher Education Statistics Agency Finance Record
* Cambridge 及び Oxford からのデータ

[1] クウェートの首長家。18 世紀より現在まで、クウェートのアミール（首長）を輩出している。

2 分でわかる！　ファンドレージング入門 其の三 II

の資金提供によって作られたコースは、教育内容や研究成果が歪められ、学問的誠実性を失うのではないかと批判された。

二点目は、**誰が資金を提供するのか？**である。資金難が続く大学にとって、多額の資金提供者の存在は大きく、容易に提供に応じてしまいがちである。しかしながら、資金提供者は誰でも良いと言う訳ではなく、政治的、文化的背景を含めた提供者と大学との関係を十分検討しないと、大学責任者の立場を危うくする。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）が、2009 年にリビアの最高指導者カダフィ大佐の次男セイフイスラム氏が総裁を務める Gaddafi International Charity and Development Foundation[2] から巨額の資金提供（150 万ポンド）を受けた。その結果、同大は、独裁政権との緊密な関係が疑問視されたうえ、さらに、セイフイスラム氏が同大のグローバル・ガバナンス研究所[3] で学び、2008 年に博士号を取得したが、論文提出の際に不正を行ったとの疑惑も浮上し、2011 年 3 月に当時の Sir Howard Davies 学長が責任をとって辞職している。

寄付活動における今後の提言

上記のとおり、大学の寄付金に関する不祥事が明るみに出る中、HEFCE（イングランド高等助成会議）は 2012 年 9 月に "Review of Philanthropy in UK Higher Education" という高等教育における寄付活動の現状と今後の提言が含まれた報告書を公表した。その提言に、大学は、

1. 寄付活動において成功例を基に、各大学の持つ特色や強みを生かして積極的に活動を行うべきである、
2. 外部の支援者と積極的に交流を行い、寄付を通じてビジネスライクな関係を築くべきである、
3. 寄付活動に対する権限を強化するとともに、次期学長の選考基準の一つに、寄付金活動への熱意や卒業生とのコミュニケーション能力に長けた人物という基準を追加すべきである、
4. 寄付活動に対して功績を挙げた教職員を評価する制度を創設すべきである、
5. 地元における寄付文化の醸成に努めなければならない、
6. 寄付を受領する際の明確な手順やガイドラインを定めなければならない、

（図 2）巨額の寄付金はどこにいくのか？ 100 万ポンド以上の寄付の状況（2010 – 11）

寄付先	100 万ポンド以上の寄付者数	寄付金総額
財団	60	4.94 億ポンド
高等教育機関	57	4.05 億ポンド
学術・文化機関	30	1.09 億ポンド

出展：The Coutts Million Pound Donor Report 2012

と果たすべき役割が述べられている。その他、同報告書は、英国政府に対して、大学の寄付活動の重要性を高く評価し、

1. 所得税控除制度の継続、
2. 寄付の適正処理の推進、
3. 資産に係る税控除対象の拡大

を要請している。

透明性の高い資金受領の方策

今後、英国では政府を挙げて大学の寄付活動を促して行くことになるが、実際、寄付活動を行っていくうえで、また世論からの批判を受けないためには何が必要であろうか。第一に、教育と研究の誠実性（Academic Integrity）に関する明白な基準や実施要項を適切に備えるべきである。その点に関して、Research Council 等の政府系助成機関や Welcome Trust[4] に代表される公益信託団体も同様に大学に対して要求すべきである。第二に、資金提供側と受領側とで、国際的な資金提供の規範を双方で醸成していく必要がある。因みに国際的な資金受領の実績が多いアメリカの大学では、既に国際的な資金提供の規範が確立されている。第三は、おそらく最も重要な点として、資金提供を受ける際、利益と不利益のバランスを、教職員や学生の個人又は大学の組織的な側面から十分検討し、その結果として大学の執行部が最終判断をすべきである。このような判断基準や透明性の高い指針を、常に大学において検討すべきであると Times Higher Education 誌は警鐘を鳴らしており、その結果として、英国の大学が引き続き繁栄され、世界のリーダーシップを発揮し、また世界に誇れる研究と教育の成果を出し続けるのだと述べている。今後、日本の大学でも様々な資金提供を海外から受けることが想定されるが、英国の事例を参考に、有益で透明性の高い資金提供が促進されることを願うものである。（松本）

[2] 国際的非政府組織で、社会、経済、文化、人道分野における人道的活動を行うことを目的に 2003 年にジュネーブで設立。
[3] 2011 年 7 月に研究所は閉鎖された。
[4] 英国に本拠地を持つ医学研究支援等を目的とする公益信託団体。アメリカ出身の製薬長者のサー・ヘンリー・ウェルカムの財産を管理するため、1936 年に設立された。

ウェールズ事業説明会

Professor Keith Alan Shore による発表

JSPS London オフィス近くの Euston 駅から列車に乗ること約 3 時間。羊がのんびりと草をはむ牧歌的な風景や真っ青な空と海を車窓から眺めながら、北ウェールズにある Bangor 市に到着した。2014 年 3 月 3 日、この市にある Bangor University において今年度最後となる JSPS 事業説明会が開催された。イングランドとウェールズで一番高いスノードン山を遠くに臨み、アイルランドにつながるアイリッシュ海を近くに、そのような豊かな自然に囲まれたこの大学は、日本では早稲田大学・龍谷大学・日本大学と交流が深い。

JSPS London からは平松センター長他 4 名が参加し、JSPS の事業紹介が行われた。また、JSPS のプログラムを利用して奈良先端科学技術大学院大学で研究を行った、Professor Keith Alan Shore（School of Electronic Engineering, Bangor University）からは、同氏が訪れた日本各地の写真とともに、研究活動についての発表がユーモアたっぷりに行われた。30 名の参加者が食い入るように発表を聞いていたのが大変印象的であった。

事業説明会の前には、Vice-Chancellor である Professor John Hughes への表敬訪問の機会をいただき、Bangor University と JSPS 事業を通した学術交流の可能性等についての意見交換を行うこともできた。

これまで何度か参加をさせていただいた事業説明会。説明会後、その大学からの応募や問合わせが増えたといった知らせを耳にするたび嬉しい思いがしていた。間もなく英国を離れる私は、Bangor University の知らせを直接聞くことはできないが、遠い日本の地より、北ウェールズの美しい風景を思い出しながら、交流を見守りたい。（安藤）

Vice-Chancellor・Professor John Hughes と

ぽりーさんの英国玉手箱

tamatebako

Q イギリス英語とひと口に言うけれど

イギリスでは、英語は英語でも様々なアクセントや訛りが聞こえてきます。この多様性はどのような意味を持っているのでしょうか？

A イギリスでは数多くの方言があります。例えば、イングランド北部が舞台の人気長寿ドラマ「Coronation Street」では、コックニーと呼ばれるロンドンの下町英語を話す人物が登場したりと、イギリス各地の言葉・文化をドラマの売りにしています。多くの移民を受け入れてきたことにより、方言はより一層発展しました。これは、方言が人々のアイデンティティを反映していることの表れでしょう。一方で、この多様な方言とは正反対にあるのが、"Received English" と呼ばれる標準イギリス英語です。この標準英語は、王族貴族が話してきた明瞭で歯切れの良い、いわゆる "Queen's English" を受け継ぐもので、BBC のアナウンサーも使ってきたことにより、世界中で認識されるようになりました。階級社会の残るイギリスでは、教養のある中流階級以上のものとされる標準英語を喋ることが、今でも成功の鍵とされています。英語を母語としない人が標準英語を学ばなければとプレッシャーを感じるのも理解できます。私自身は、職場では標準英語を話しますが、故郷のウェールズの田舎町に帰ったときには、英語とウェールズ語が合わさった "Kitchen Welsh" で家族や友人と会話を楽しんでいます。

日本人の素朴な疑問に英国人ぽりーさんが答えてくれます。なにか疑問に感じたら、①氏名 ②所属 ③住所 ④質問事項を明記のうえ、ニュースレター編集室 enquire@jsps.org まで、お送りください。質問採用者には粗品を差し上げます。

赴任のごあいさつ

2014 年 2 月に西澤 Research Administrator、4 月に熊谷アドバイザー（文部科学省）、香月国際協力員（熊本大学）、藤田国際協力員（東京大学）が新たに着任した。

以下、新任職員からのコメントを紹介する。

熊谷アドバイザー

前任地の文部科学省高等教育局国立大学法人支援課では、第３期中期目標期間に向けた改革加速期間に各国立大学が取り組むミッションの再定義を踏まえた機能強化策の支援をしてまいりましたが、私自身は海外の経験がまったくなく、異文化と交流しより広い視野を身につけるためここへまいりました。

当センターでは英国の高等教育・学術関係の動向を調査し、日本の大学関係者の皆様に役立つ情報を発信する業務を担当します。日本と同様、英国でも高等教育改革の真っ只中であり、国民もとても高い関心を示しています。まずは英国高等教育改革の現状を学び直し、その上で時宜に適った情報をお伝えしていきたいと考えております。

よろしくお願い申し上げます。

香月国際協力員

JSPS London では主に会計業務を担当させていただきます。初めての海外勤務で戸惑うこともありますが、担当する業務を的確に処理していきたいと思います。また、限られた期間の中でできるだけ多くの新しいことを経験して、１年間の英国滞在を自分にとって実りあるものにしたいと思います。

藤田国際協力員

JSPS London では主に総務・広報業務を担当させていただきます。所属大学において、研究者を志す多くの優秀な学生さんと接し、若手研究者の育成に興味をもったことが、当研修参加の志望理由の一つです。この１年間、センターと関わってくださる様々な方々のお役に少しでも立てるよう、また、多くのことを吸収し、成長できるよう努力してまいりたいと思います。

西澤 Research Administrator

２月より Research Administrator として着任いたしました。イギリスの高等教育情報調査を始め、慣れないことばかりの中で、スタッフの皆さんには大変ご親切に色々と教えて頂いております。４月から加わった新しいスタッフの皆様とも協力して、また新たな気持ちで JSPS ロンドンを盛り上げて参りたいと思っております。

（左から）藤田、香月国際協力員、熊谷アドバイザー、西澤 Research Administrator

たかがTEA、されどTEA。

小欄の最終回は TEA で締めくくろう。Tea がイギリス人の生活に深く染み込んでいることは、いまさら言うまでもあるまい。Would you like a cup of tea? は、イギリス中で毎日何千万回と口にされているはず。訪問先で真っ先にかけられる言葉でもある。第 2 次大戦初期、連合軍が独軍に打ち負かされ、33 万人余

平松幸三の
ご存じですか？

がダンケルクから奇跡的に脱出したとき、殿を務めた部隊は敵の猛攻を受け、多数の犠牲と俘虜を出した。だがごく一部だが海に逃れて漂流した兵士がいた。救助された 1 人が後日語っている。僚船上で最初にかけられた言葉が D' you wanna a cup of tea? だった、と。これを読んで胸が熱くなったら、あなたはイギリス通だ。生死の境をさまよった者に対し、まるで海水浴から上がってきたかのごとくに D' you wanna a cup of tea? ありきたりの tea を、たぶんあえて無造作に差し出す。この SENSE OF HUMOUR。これ以上のイギリス的もてなしがあろうか？ああ！祖国！彼が口にした生涯最高の tea だったにちがいない。

Pre-Departure Seminar and Evening Reception 開催

2014 年 4 月 24 日、JSPS フェローシップ事業に新規採択されたフェローを招き、Pre-Departure Seminar が開催された。当セミナーは、本事業を最大限に活用できるよう、参加者に日本での研究・日常生活に関する情報提供を行うとともに、参加者間の交流を促すことを目的に、例年 5 月と 10 月に開催している。今回は 43 名の出席があった。

平松センター長の開会挨拶に続き、渡日後の交流促進を目的として参加者が順に自己紹介を行った。フェローの派遣先は、北は東北大学から南は琉球大学にわたり、研究分野も法文学から脳機能開発研究まで多様である。その後、松本副センター長から本会の事業概要、Ms. Watson International Programme Co-ordinator から JSPS サマー・プログラムの詳細について説明がなされた。次いで、同窓会員より、日本での経験を最大限有効なものとし、またそれを英国でのキャリアに生かすための、自身の経験を踏まえた具体的かつ親身で実用的なアドバイスが贈られた。また、Japan Foundation および Great Britain Sasakawa Foundation のゲストスピーカーから日本での研究に対する資金援助についてお話しいただいた。

Pre-Departure Seminar 終了後、英国同窓会員、在英日本人研究者、日英学術交流に関心のあるゲストの方々と新規フェローの交流促進を目的とした Evening Reception が開催され、参加者は 100 名以上に上った。

松本副センター長の開会挨拶に続き、英国新同窓会長である Dr. Ruth Goodridge による挨拶では、同窓会員対象の再招へい事業、BRIDGE Programme やシンポジウムスキームの紹介、また、アイルランド出身のフェローを同窓会員に含め、それに伴い同窓会名が "The UK-JSPS Alumni Association" から "The JSPS Alumni Association of the UK and the Republic of Ireland" へと変更になったとの報告がなされた。その後、シンポジウムスキームを利用した同窓会員より、シンポジウムの成果等を振り返るプレゼンテーションが行われた。そして、今回が任期中最後の会合となる平松センター長より、参加者、関係各位への謝意を込めた退任挨拶が述べられた。

その後の歓談では、参加者は、会場に熱気がこもるほど、大いに交流を深め、盛会に終わった。 (Polly)

Pre-Departure Seminar and Evening Reception 参加者と

セミナー参加者からのコメント

Professor Stefano Moretti (University of Southampton), Invitation Fellow

日本への渡航経験のある私にとっても、大変役に立つ内容でした。参加できたことを嬉しく思います。JSPS、Japan Foundation、同窓会組織等の活動についての理解を深めることもできました。本日のイベントを通じて築いた他の参加者とのネットワークが、フェローシップ参加後も続いていくことを期待します。

Dr. Carmen Hubbard (University of Newcastle), Invitation Fellow

お招きいただき本当にありがとうございました！と声を大にして申し上げたい気持ちです。セミナー、イブニングレセプション共に、スピーカーの生き生きとしたプレゼンテーションや参加者同士の素晴らしい交流があり、大変有益でした。この会合を準備してくださった皆様、特にポリー様、ありがとうございました。

Dr. Jack Wells (University College London), Short Term Postdoctoral Fellowship

最初に自己紹介の時間が設けられていたので、休憩時間に早速、派遣先が近い地域のフェロー同士で交流することができました。講演からは多くの情報を入手でき、日本での生活に役立つ実用的なアイデアをたくさん得られたので、これから待ち受ける日本での経験が益々楽しみになりました。また、JSPS 以外の財団のお話も聞くことができ、全体として、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

Ms. Mhairi Matheson (University of Glasgow), Summer Programme Fellow

セミナーでは、日本での生活に関し貴重な見識を得ることができ、イブニングレセプションでは、他の参加者と交流できました。また、学術振興のために JSPS が果たしている役割への理解を深め、JSPS 同窓会スキームの説明からは、フェローシップ受賞者がいかに研究の機会に恵まれているかを感じ、JSPS のフェローシッププログラムの価値を改めて認識しました。

Pre-Departure Seminar にて。
自己紹介の様子

このページでは、JSPS にて実施する国際交流事業やイベントなどを抜粋して紹介します。なお、詳細は各事業ウェブサイトをご覧ください。

◆ JSPS が募集する国際交流事業

外国人特別研究員（欧米短期）

欧米諸国（アメリカ合衆国、カナダ並びに欧州連合（EU）加盟国（2013 年 4 月 1 日現在）及びスイス、ノルウェー、ロシア）の博士号取得前後の優秀な若手研究者に対して、我が国の大学等において日本側受入研究者の指導のもとに、共同で研究に従事する機会を提供します。

＜ JSPS 東京本部受付分＞

申請受付期間： 2014 年 7 月 7 日（月）～ 7 月 11 日（金）

※ 2014 年度募集要項では申請受付期間が従来の年 6 回から年 4 回となっているため、今回が 2014 年度分募集の最終受付（第 4 回）です。

※上記の申請受付期間は所属機関長から本会に申請書類が提出される期限であり、申請者が所属機関長に申請書類を提出する期限は、上記より前であることが予想されますのでご注意ください。

来日時期：2015 年 1 月 1 日～ 2015 年 3 月 31 日の間に来日し、滞在期間は 1 ヶ月以上 12 ヶ月以内

支給額　：① 往復航空券　②滞在費 362,000 円／月（日本における研究開始時に博士の学位を有する者）、200,000 円／月（日本における研究開始時に博士の学位を有しない者）③その他（海外旅行傷害保険、渡日一時金等）

申請方法：日本側受入研究者が JSPS 東京本部に申請

採用予定件数：年間計 60 名程度

→ 募集要項等は ＜こちら＞ よりご覧いただけます。

＜ JSPS London 受付分＞

JSPS London では外国人特別研究員（欧米短期）募集を年 2 回行っており、2014 年度第 2 回分の申請受付締切は、6 月 4 日（水）です。

※ 日英交流事業の最新公募情報は ＜こちら＞ よりご覧いただけます。

頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム

大学等研究機関が、海外のトップクラスの研究機関と世界水準の国際共同研究を行うことを通じて、相手側への若手研究者の長期派遣と相手側からの研究者招へいの双方向の人的交流を展開する取組を支援します。2013 年度まで「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」として公募していたプログラムについて、名称及び事業内容等を改定して公募するものです。

→ 募集要項等詳細については ＜こちら＞ よりご覧いただけます。

◆ JSPS London イベント情報

シンポジウム

2014 年 7 月に、JSPS のシンポジウム開催スキームによって採択されたシンポジウムが開催される予定です。

● From Duplexes to Quadruplexes – Understanding DNA structure and Function

会場：University of Reading

日程：7 月 1 日～ 4 日

日本からは九州大学、甲南大学、名古屋大学、大阪大学、上智大学の研究者 5 名、英国からは University of Oxford, University of Liverpool, University of Reading, University of Sheffield の研究者 4 名が講師として参加予定。

→ 当シンポジウムに関する情報は、詳細が決定され次第 ＜こちら＞ に掲載される予定です。

● The Universe in the light of AKARI and SPICA

会場：University of Oxford

日程：7 月 9 日～ 11 日

日本からは宇宙航空研究開発機構・宇宙科学研究所、東京大学、名古屋大学、国立天文台の研究者 5 名、英国からは University of Oxford 等の研究者 13 名が講師として参加予定。

→ 当シンポジウムに関する情報は、詳細が決定され次第 ＜こちら＞ に掲載される予定です。

JSPS 事業説明会

JSPS London では、定期的に英国内の大学等を訪問し、JSPS が実施する事業の紹介を行っています。最新情報は、随時当センターウェブサイトに掲載してまいります。

所属機関での JSPS 事業説明会の開催をご希望の場合は、enquire@jsps.org までご連絡ください。

◆ JSPS 各種情報を定期的にお届けします！

JSPS London facebook ページ

Facebook ユーザーの方には、公募情報や英国学術情報等ウェブの更新情報をタイムリーにお届けします。

→ facebook ページは ＜こちら＞から。

在英日本人研究者の皆様へ

ご希望の方に、JSPS London が開催するイベントのご案内やニュースレター等をお届けしています。当センターからの情報提供を希望される方は、是非下記リンクよりご登録ください。なお、対象は、英国の大学・研究機関に所属する研究者（ポスドク・大学院生含む）及び在英日系企業研究所の研究者の方々です。

→ 詳しくは ＜こちら＞

JSPS Monthly（学振便り）

JSPS の公募案内や活動報告等を、毎月第 1 月曜日にお届けするサービスです（購読無料）。情報提供を希望される方は、こちらの ＜リンク＞ よりご登録ください。

（西澤）

編集を終えて

今号の巻頭特集では、センター長離任にあたり、センター長自らがインタビューとなり、センターのこれまでの活動と将来、そして関係の皆様への感謝の想い等を語らせていただきました。これまで当センターと関わってくださった皆様はもちろんのこと、当センターの活動内容等が分かりやすく紹介されていますので、「ロンドンセンターってどんなことをしているの？」という方にも是非お読みいただければと思います。最終回となる「平松幸三のご存知ですか」もお楽しみください。その他の記事も、今号も心を込めてお届けいたします。

当センターは今後も、新センター長のもと、日英学術交流のさらなる促進のため尽力してまいります。「交流の促進」というイメージから、今年度は、英国の「乗り物」をテーマとした表紙でお送りします。今年度第 1 回目となる今号の表紙は、映画「ハリー・ポッター」シリーズにも登場する、世界最古といわれるコンクリート製高架橋、グレンフィナン高架橋（スコットランド）を走る蒸気機関車です。

（藤田）

監　　修：　平松　幸三
編 集 長：　松本　秀幸
編集担当：　藤田　明子

JSPS London

日本学術振興会　ロンドン研究連絡センター（JSPS London）
14 Stephenson Way, London NW1 2HD United Kingdom
TEL: +44-(0)20-7255-4660 / FAX: +44-(0)20-7255-4669
email: enquire@jsps.org　Website: http://www.jsps.org/index.html
facebook